

渋江抽斎編『卿雲輪困附録』

柏崎順子

西尾市立図書館岩瀬文庫に『卿雲輪困附録』と題する漢籍善本目録の写本が所蔵されている。美濃判一卷一冊、墨付五十四丁（正編四十八丁、補遺六丁）、全紙一筆で、四十八丁ウ八行目から四十八丁オ五行目にかけて、藍本に存する識語、「右一卷所嘗聞於菴齋先生以筆記也。刀圭之暇、緝修繕写、以備他日參攻。末附余紙者為後來所見。當補統之。今時昇平二百余年、文運道明、秘冊遙出、異域伝称、舶載日多。先古以来未曾有若今日之盛。此書雖一小冊、足以見其一端。亦只仰太平之余沢爾。乙未季秋抽齋全善」が移写されている。これによって、本書は抽齋渋江全善が編纂したものであること、記載する情報は、抽齋の経学の師、菴齋狩谷望之から得たものであること、成立は天保六年乙未（一八三五）九月であることが判明する。識語にいう「末附余紙」は補遺六丁のことと推察されるので、補遺を含む全巻がこのとき成立したと考えてよいであろう。同年閏七月四日に菴齋が病没しているので、それを契機に本書の「緝修繕写」を思い立ったものと推測する。また、四十八丁オ八行目に相当する箇所に、写本の書作者の識語、「右友人弘前医官渋江子良全善所撰。天保庚子十月二十七日自鈔。業広」が書きとめてある。子良は抽齋の字である。これによって、本写本は、椿庭山田業広が抽齋自筆稿本を借りて手写したものであること、成立は天保十一年庚子（一八四〇）十月二十七日であることが判明する。椿庭は抽齋と同じく医学を蘭軒伊沢信恬に学んでいる。椿庭にとって抽齋は同門の先輩であったのである。

『卿雲輪困附録』については、大野洒竹の明治四十二年の購入目録に、浅倉屋書店から抽齋手写本『卿雲輪困附録』を入手したが、その二日後、島田翰から海保漁村自筆稿本『経籍源流攷』を得て比較したところ、同一の内容であったので、抽齋手写本は浅倉屋書店に返却したということが書かれていると、かつて川瀬一馬氏が指摘されたことがある⁽¹⁾。両本はその後行方が知れなくなり、川瀬氏も未見ということで、手がかりの乏しい話なのであるが、洒竹がはじめに入手したという『卿雲輪困附録』が抽齋自筆本であったとすれば、その本こそ椿庭手写本の藍本のはずである。洒竹は、『経籍源流攷』が原本で、『卿雲輪困附録』はその転写本と考え、原本を得た以上、転写本は不要であるとして浅倉屋書店に返却したのであろうが、不審に思うのは、洒竹が『卿雲輪困附録』に存していたはずの抽齋の識語に注意することがなかったらしいことである。注意していれば、該本は、抽齋手写本ではなく、抽齋自筆稿本であることに気づいたはずである。この疑問は、両本が出現しないかぎり解決がつか

ない。

川瀬氏はまた、洒竹が入手した『経籍源流攷』は、静嘉堂文庫所蔵岡本保孝自筆本『経籍攷』と同一の内容の本であったのではないかと推測されている⁽²⁾。ということは、川瀬氏は、洒竹が入手した『卿雲輪困附録』の内容も『経籍攷』と同一と推測されていたと解してよいであろう。そこで、椿庭手写本『卿雲輪困附録』と保孝自筆本『経籍攷』とを比較してみたところ、細部においては多数の異同が存するものの、全体としては祖本を同じくする本と認定してよいことが判明した。『経籍攷』は『卿雲輪困附録』の一本を藍本とする転写本に保孝の補訂が加えられた本だったのである。紙数の制約上、全巻にわたり例証をあげることができないので、一例として、両本の『周易』の項の記載を対照して示しておく。両本とも書写後の書入れと認められる記事は省略した。

椿庭手写本『卿雲輪困附録』	保孝自筆本『経籍攷』
周易	周易
单経	单経
活字刊本疑抄出于朱熹注本	活字刊本疑抄出于朱熹注本
経注	経注
明応年間抄本狩谷望之求古楼蔵	明応年間抄本狩谷望之求古楼蔵
卷一欠	卷一欠
永正年間抄本求古楼蔵	永正年間抄本狩谷
大永年間抄本求古楼蔵	大永年間抄本狩
天正年間抄本小島尚質宝楽堂蔵	天正年間抄本小島尚質宝楽堂蔵
天正年間抄纂図互注本山田業広九折堂蔵	天正年間抄纂図互注本山田業広九折堂蔵
二三両卷欠	二三両卷欠
慶長年間抄本曲直瀬隆懐仙閣蔵	慶長年間抄本曲直瀬隆懐仙閣蔵
活字刊重言重意本円光寺刊	活字刊重言重意本円光寺刊
右六卷本	右六卷本
宋槧本人見氏蔵	宋槧本人見氏蔵
南宋槧小刻本昌平学蔵	南宋槧小刻本昌平学蔵
明応年間抄本求古楼蔵	明応年間抄本求古楼蔵
享禄年間抄本波江全善柳原書屋蔵	享禄年間抄本波江全善柳原書屋蔵
此本略例无注	此本略例无注
全善所蔵古本多係市野迷庵先生旧物下倣之	(十九字なし)
文明年間抄本増島固竹陰書屋蔵	文明年間抄本増島固竹陰書屋蔵
天正年間抄本昌平学蔵	天正年間抄本昌平
古抄摺本京師福井需崇蘭館蔵	古抄摺本京師福井需崇蘭館蔵
活字刊本	活字刊本

又上総今関正運刊	又上総今関正運刊
旧板本依活字本	旧板本依活字本
右十巻本	右十巻本
单疏	单疏
応永年間抄本求古楼蔵	応永年間抄本狩
永禄年間抄本求古楼蔵	永禄……………狩
永禄年間抄本竹陰書屋蔵	永禄……………増
元亀年間抄本柳原書屋蔵	元亀……………汲
天正年間抄本求古楼蔵	天正……………狩
天正十年抄本昌平学蔵	天正十年………昌
注疏	注疏
宋槧本足利学蔵	宋槧本足利学蔵
天文年間抄本求古楼蔵	天文……………狩
巻十以下欠	巻十以下欠
永禄年間影抄宋槧本昌平学蔵	永禄年間影抄宋槧本昌
李鼎祚集解	李鼎祚集解
汲古閣本明崇禎中毛晋津逮秘書所収	毛晋本津逮
雅雨堂本清乾隆中盧見曾刊	雅雨堂本
清刊本依雅雨堂本	清刊本依雅雨堂本
易緯鄭玄注	易緯鄭玄注
武英殿本清乾隆中聚珍板書所収	武英殿本
雅雨堂本乾鑿度一書独収入	雅雨堂本乾鑿度一書独収入

椿庭手写本『卿雲輪囷附録』と保孝自筆本『経籍攷』の本文の異同の大半は、保孝が手間を惜しんで藍本の記載を簡略化して書写したことから生じたものであって、全体としては、両本の本文は共通の祖本から派生したのは明らかであろう。書写にあたってなぜ保孝は手間を惜しんだのか、それは保孝が『卿雲輪囷附録』を座右に置く目的で書写したからではなく、「経籍攷」と題する漢籍善本目録を自ら編纂しようとして、その材料として、俗にいうたき台として、『卿雲輪囷附録』の記載を利用したに過ぎなかったからであろう。保孝自筆本の前表紙見返しに書きとめられた識語「閻若璩云、学須博、書須善本、[見四書釈地又統／闕里條] 錢大昕云、経史当得善本、若日読誤書、妄生駁難、其不見笑於大方者鮮矣、[見養新／録卷三] 善手錢氏之言、寔邨夫子之砭針也、作経籍攷」のなかで、閻若璩や錢大昕の言葉を引用して「作経籍攷。況斎岡孝識」と結んでいることと、『経籍攷』の随所で『卿雲輪囷附録』の記載を保孝の所見・所聞をもって補訂していることを考えあわせるならば、上記のように考えてまずあやまりあるまい。

ただ、『経籍攷』には既述の抽齋の識語が移写されていない。また、椿庭手写本には正編のほかにも補遺が付属しているが、『経籍攷』にはその補遺六丁に記載する書目が書写されていない

い。椿庭手写本の補遺に記載された本のいくつかは『経籍攷』の本文上部の余白に追記されているが、記載内容が椿庭手写本のそれと必ずしも一致しないので、これは本文の書写後に保孝の所見・所聞を書き入れたものと推察する。

抽斎の識語が移写されていないのは、『経籍攷』編纂の材料として『卿雲輪困附録』の記載を利用することにしたのであるとすれば、識語までも書写する必要はないのであるから、省略したと考えることもできるが、補遺六丁に記載された書目は『経籍攷』を編纂する上で有益な情報が多数含まれているのであるから、保孝の目にとまっていれば、必ず書写しているはずである。それが書写されていないということは、『経籍攷』の藍本に椿庭手写本の補遺に相当する書目が記載されていないとしか考えられない。椿庭手写本『卿雲輪困附録』も保孝自筆本『経籍攷』も、抽斎自筆稿本『卿雲輪困附録』を祖本として成立したとすれば、椿庭手写本は抽斎の識語という「緝修繕写」を経た後の正編・補遺を完備した段階の抽斎自筆稿本の転写本で、保孝自筆の本文は補遺が付せられる以前の抽斎自筆稿本か、その転写本によって書写されたものと考えよりほかない。既に述べたように、抽斎の識語は補遺が成立した後に書き入れられたと考えられる。『経籍攷』に抽斎の識語が移写されていないのは、書写の手間を惜しんだからではなく、藍本にそれが存していなかったからと考えるのがあっているのではあるまいか。

洒竹が入手したという漁村自筆稿本『経籍源流攷』も内容は『卿雲輪困附録』と同一と認められたというから、漁村も保孝同様『卿雲輪困附録』の記載をもとにして漢籍善本目録を編纂しようとしていたのではあるまいか。洒竹が『卿雲輪困附録』と同一の内容であったというから、『経籍源流攷』も、『経籍攷』同様、完成にはほど遠い状態で終わっていたのであろう。あるいは、後述する『経籍訪古志』の編纂に漁村が参画することになって中絶したのかもしれない。

余談になるが、ここで川瀬氏が『経籍攷』を『留真目録』の加筆本と認定されていることについて、私見を述べておく。『留真目録』は、川瀬氏によれば、抽斎と枳園森立之が主幹となって編纂した漢籍善本解題目録『経籍訪古志』の編纂原簿で、経部は抽斎が、史部は椿庭が、子部は枳園と舟庵堀川未済とが、集部は椿庭と抱沖小島尚真とが担当して作成したものという。川瀬氏が例示している『留真目録』の『周易』の項と、上に表示した『卿雲輪困附録』『経籍攷』の『周易』の項とを比較すれば明らかであろうが、両者に掲出されている漢籍の古鈔本古刊本はおおむね共通しているものの、記載方式は両者全く異なっているのである。例えば、後者が「経注」とする標目は前者においては「周易王弼注」とし、後者が「注疏」とする標目は前者においては「周易王弼韓康泊注」としていること、また、後者が「永正年間抄本求古楼藏（または狩谷）」と記載する本を前者においては「又^{同上}永正」と記載していることなど、記載内容は同じであっても、記載方式は両者全く異にしているのである。『経籍攷』の本文は既に述べたように『卿雲輪困附録』の補遺が追加される以前の段階の抽斎自筆稿本かその転写本を藍本とすると考えるべきで、『留真目録』に加筆したと考えるのは不適當であろう。

『卿雲輪困附録』は、題名から推察するに、『卿雲輪困録』の付録とするつもりで編纂した

漢籍善本目録であるらしい。『卿雲輪困録』の全容は必ずしも明らかではないが、現存しているのは西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵の美濃判四冊本である。岩瀬文庫本は第一冊から第二冊十九丁までに、「求古楼展観第一」と題して、掖斎と蘭軒門人小山吉人（鶴墩清川愷）とが分担して筆記した文化十二年五月七日、六月七日、七月七日、八月七日、九月十日、十月十日、計六回分の求古楼展観の出陳書目録が、第二冊二十丁オから第三冊十六丁ウまでに、掖斎が副本として作らせたものであろうか、同じく「求古楼展観第一」と題する五月七日、六月七日、七月七日、計三回分（七月分一部欠）の求古楼展観の出陳目録が、第三冊十七丁オ以下に文化十二年十二月十四日の求古楼展観の、同二十二丁オ以下に文化十三年三月十五日の求古楼展観の出陳書目録が収めてあり、第四冊に、柏軒伊沢信重手写本を枳園の孫、森幸子が手写したという求古楼所蔵漢籍善本目録不完本が収めてある。幸子手写本であるとすれば、その成立は近代であるはずであるから、これは本来『卿雲輪困録』に付属するものではなかったと考えられる。ほかに、戦災で焼失したといわれているが、安田文庫に半紙判一冊が所蔵されていた³⁾。この一冊には、「求古楼展観第二」と題して、文化十三年正月三十日、六月十三日、閏八月、計三回分の求古楼展観の出陳目録が収めてあったという。『卿雲輪困録』の本来の姿は、岩瀬文庫本の第四冊を除く三冊と安田文庫本一冊とを合わせた計四冊であったと推測される。また、「求古楼展観第二」に収められるべき文化十三年三月十五日の分が岩瀬文庫本の第三冊末尾に綴じこまれているのは、誤ってこの一回分のみ美濃判の料紙に筆記してしまったので、製本する際に、同じ美濃判の岩瀬文庫本の末尾に収めることにしたのではないかと推測する。

川瀬氏が指摘されているように、『卿雲輪困録』は『経籍訪古志』が生まれる基を成した書物である。しかし、抽斎・枳園連名の「経籍訪古志附言」の冒頭にいう「是書編録発端於狩谷掖翁在日」の「端」を、求古楼展観、ないしは『卿雲輪困録』が作られたことを指すと解するのは、必ずしも正鵠を得ているとは言えないのではあるまいか。『経籍訪古志』の編纂に直接かかわった人物のなかで求古楼展観に参加したことが確認できるものは、藍庭ただ一人である。『卿雲輪困録』に収める「求古楼展観書目」は出陳された漢籍古鈔本・古刊本の当時の状態や所蔵者に関して貴重な情報を記録しているものの、四部分類法にしたがって諸書を配列し、解説している『経籍訪古志』と異なり、諸書の配列は無秩序に近く、しいて言えば出陳者の身分を考慮して諸書を配列し、記録している点、また、検索に関して全く配慮がなされていない点など、書目といっても出陳者に関する覚書の域を出ないものである。求古楼展観、ないしは『卿雲輪困録』が『経籍訪古志』の淵源であるとしても、それがただちに『経籍訪古志』編纂の「端」となったと言われると首肯しかねるのはその点である。「経籍訪古志附言」は、上記引用に続けて、「凡弁鈔刻之源委流別、得之其指授者為多。」と述べている。「其」は掖斎を指す。『卿雲輪困附録』の抽斎の識語にも「所嘗聞於掖斎先生以筆記也。」と述べていることを考え合わせるならば、「経籍訪古志附言」にいう「端」は、抽斎・枳園がその場にいたときのこと、例えば、掖斎を囲んだ席で、漢籍善本目録の編纂が緊要な課題であるというようなことが話題になったときのことを指していると解すべきではなかろうか。掖斎は、晩年、自宅や知人宅を会場として、古書会と称する漢籍古鈔本・古刊本の研究会を催し

たという⁽⁴⁾。「経籍訪古志附言」に「得之其指授」というのは、その席でのことと考えてよいであろう。また、抽斎が「所嘗聞於菴齋先生」というのも主としてこの席で聞いたことと解するのが妥当であろう。そうであるとすれば、四部分類法にしたがって編纂された『卿雲輪困附録』は、「経籍訪古志附言」にいう「端」に発する最初の成果と位置付けることが可能になる。なぜなら、既に述べたように、『卿雲輪困附録』が成立したのは菴齋が没した二カ月後の天保六年九月であるが、保孝自筆本『経籍攷』の本文は、「緝修繕写」して識語が書き入れられる以前の段階の抽斎自筆稿本『卿雲輪困附録』か、その転写本によって書写されたと考えられるところから、『卿雲輪困附録』の正編は、菴齋の生前に研究用として使えるところまでできていたと考えられるからである。『卿雲輪困附録』の記載の最も大きな特徴は、漢籍古鈔本・古刊本の個々の所蔵者を明記していることである。編纂の重点がそこに置かれていたとすれば、『卿雲輪困附録』は諸本調査の基本台帳として作られた可能性があるということになる。

また、諸本調査の基本台帳として作られたということになれば、菴齋の生前に、一度は漢籍善本目録の編纂が具体化したことがあったということにもなる。編纂が軌道に乗らなかったのは、それから間もなく菴齋が病没したからであるとすれば、関係者の大きな心残りとなったであろうことは想像にかたくない。菴齋病死の直後に抽斎が本書稿本の「緝修繕写」に取り組んでいること、また、菴齋没後十七年目の嘉永五年に菴庭の呼びかけに応じて抽斎・枳園がただちに立って『経籍訪古志』の編纂に取り組み、五年後の安政四年に完成していることなどを考え合わせると、「経籍訪古志附言」にいう「端」は、求古楼展観ないしは『卿雲輪困附録』が作られたことを指すと考えるより、菴齋の生前に抽斎・枳園等が端緒を開いたことを回顧するというと解するほうが、上記引用に続けて「厥後小島宝素、又屢加搜討、而未完。」というところとの関連も明確になり、あたっているように思われるのである。

『卿雲輪困附録』の正編は、四部分類法にしたがって、どういう古鈔本・古刊本を誰が所蔵しているか、そのほか特記すべき書誌学的事項を記載した書目である。

「経部」は更に「七経類」「総経類」「小学類」の三類にわけ、「七経類」には「周易」「尚書」「毛詩」「儀礼」「周礼」「左伝」「公羊伝」「穀梁伝」「孝経」「論語」の目を立て、それぞれ「単経」「経注」「単疏」「注疏」、そのほか順に成立の古い本から諸本を列挙して記載している。また、「総経類」には「十三経」「經典釈文」「四書」の三書を掲出して、同様に成立の古い本から諸本を列挙して記載し、「小学類」には「爾雅」「急就篇」「方言」「釈名」「説文解字」「広雅」「玉篇」「匡謬正俗」「干禄字書」「五経文字・九経字様」「竜龕手鑑」「韻鏡」「広韻」「集韻」「礼部韻略」「古今韻会」を掲出して、「爾雅」は「七経類」に準じて「単経」「経注」「注疏」の順に、「説文解字」は大徐本・韻府・小徐本の順に、他は成立の古い本から諸本を列挙して記載している。「経部」に記載された諸本の総数は叢書所収本を含めて二百三十三（他に椿庭後補と推定されるもの一）である。『経籍訪古志』が「易類」「書類」「詩類」「礼類」「春秋類」「孝経類」「四書類」「楽類」「小学類」の九類にわけて諸本を記載するのとは少し異なっている。分類法が変更された経緯については、『留真目録』の全容が明らかになった時点で考察するのが妥当であろう。

「史部」は更に「正史類」「別史類」「地理類」「職官政書類」の四類にわけ、各注ごとに成立の古い本から順に諸本を列挙して記載している。「史部」に記載された諸本の総数は、叢書所収本を含めて九十三（ほかに椿庭後補と推定されるもの二）である。『経籍訪古志』が「正史類」「編年類」「別史類」「雑史類」「伝記類」「史鈔類」「戴記類」「地理類」「職官類」「政書類」「目錄類」の十一類に分けて諸本を記載するのと大いに異なっている。

「子部」は、「儒家類」「兵家類」「法家類」「農家類」「天文算法類」「術数類」「雑家類」「類書類」「小説類」「釈家類」「道家類」「叢書類」の十二類にわけ、各注ごとに成立の古い本から順に諸本を記載している。「子部」に記載された諸本の総数は、叢書所収本も含めて三百十七（ほかに椿庭後補と推定されるもの十九）である。『経籍訪古志』が「術数類」の後に「譜録類」を加え、「叢書類」を除いて十一類に分け、諸本を記載しているのと少し異なっている。

「集部」は、「楚詞類」「別集類」「総集類」「評話類」の四類に分け、「楚辞」は各注ごとに成立の古い本から順に記載し、他は成立の古い本から順に記載している。「集部」に記載された諸本の総数は叢書所収本も含めて五十二（ほかに椿庭後補とされるもの三）である。『経籍訪古志』が「評話類」を「詩文評類」とするのと少し異なっている。

補遺に記載されている諸本の総数は、叢書所収本も含めて七十九で、正編に記載する順序にしたがって諸本を記載している。

『御雲輪困附録』に記載されていて『経籍訪古志』に記載されなかった本が若干あるが、その経緯についての考察は今後の課題としたい。

付記 国立国会図書館所蔵『況齋叢書』中にも『経籍攷』一本が収録されているが、この本は静嘉堂本に後から補足した書目・説明等を合わせて清書した本、すなわち静嘉堂本成立の後に成った本である。本論においては、川瀬氏が問題にされた静嘉堂本に基づいて論述した。

注

1. 川瀬一馬「経籍訪古志の成立一特に初稿本以前について」（『続日本書誌学之研究』講談社，昭和五十五年）六五二頁。
2. 川瀬氏前掲論文。六五二頁。
3. 川瀬一馬「安田文庫書目 自筆本の部（其の二）」（『椎園』第一輯，昭和十二年）
4. 梅谷文夫『狩谷校斎』（吉川弘文館，平成六年）一二四頁。